

ヨハネによる福音書 19 章 31 節－37 節  
「神の御旨は実現する」

《1》

主イエス・キリストは既に、十字架の上で息を引き取られました。この時から、埋葬までのことがここに述べられています。

これによって、私たちの救いは確かであること、つまり主の十字架の死によって私たちに救いが与えられるという神さまの約束が、そのとおりに実現されている。この恵みを私たちは知ります。

その日は準備の日でした。特別な安息日のための、準備の日です。「特別な」安息日というのは、その日から過越し祭が始まるからです。この祭りは、ユダヤ人たちが心から大切にし、心にかけているお祭りです。

昔、先祖たちが神さまの恵みによって、奴隷状態であったエジプトから逃れ出ることができた。これを祝う、喜びの日です。

それは土曜日から始まります。ですから、準備の日と言われているこの日は、金曜日です。そして、一日の始まりと終わりは日没の時によって決まります。それで、この日は準備の日、金曜日ですが、それもあと数時間で日没となり、終わりを迎えようとしている、という状況にありました。

そこで、十字架にかけられている者たちをどうするか、というユダヤ人たちからするととても差し迫った問題が生じていました。安息日に入ってしまうと、労働は禁止ですから十字架上の遺体を下ろすことも葬ることもできません。

また、そもそも安息日に遺体を十字架の上に残しておきたくはなかった。

それで、彼らの取った行動は、今日の残された数時間のうちに十字架上の三人を殺して、葬りなどをしてしまうことです。

それはまた、律法の定めに従うことでした。こうあります。「死体を木にかけたまま夜を過ごすことなく、必ずその日のうちに埋めねばならない」(申命記 21 章 23 節)。

それで彼らは、急ぎピラトのところへやって来ると、そのことを願い出ます。

兵士たちはやって来ると、三人の足を折って殺そうとしました。

先に二人の男の足を折って、イエスさまのもとへ来ると、イエスさまは既に死んでおられた。それで足を折ることはなかった。足を折るのは殺すためですから、その必要がもう全くないからですね。

ただし兵士たちが何人いたかわかりませんが、その中に多少疑り深い者がいたのでしょう。槍で、イエスさまの脇腹を刺しました。本当に死んだのかどうか、確認しようとしたわけです。

すると、血と水が流れ出ました。

これについて、「それを目撃した者が証ししており、その証しは真実である」と言われています。

目撃者というのは、ほかならないヨハネ自身でしょう。ヨハネは、自分の目で確か

に見たのだ、これは真実のことだ、と告げるのです。

また、この証しをする目的についても、続けて語られています。「その者は、あなたがたにも信じさせるために、自分が真実を語っていることを知っている」。

あなたがたも信じるようになるために。このための証しです。その証しは真実である。真実でない証しなどというのは、もともと言葉の矛盾でしょう。

私の証しは真実である。だから、これを受け入れ、主イエス・キリストを信じてほしい。ヨハネは心から、そう願うのです。

## 《2》

では、その真実の証しによって明らかにされているのは何でしょうか？

それは、この流れ出た「血と水」について、既に主は、それを御自身に関係することとして、語っておられました。それが、十字架においてまで、貫かれている、ということなのです。

つまり、血と水は主イエス・キリストの救いと命そのものです。その救いと命が真実で、尊いものであることが、かつてご自身が語られたように、今、十字架において現れたことにおいて、貫徹されている。

いわば、かつて言葉をもって血と水による救いと命を語られた主は、今、十字架において、目に見える形で救いと命を、現されているということです。

では、どのように語られているかと言えば、血については、6章 54～56 節を読みましょう。「私の肉を食べ、私の血を飲む者は、永遠の命を得、私はその人を終わりの日に復活させる。私の肉はまことの食べ物、私の血はまことの飲み物だからである。私の肉を食べ、私の血を飲む者は、いつも私の内におり、私もまたいつもその人の内にいる」。

血によって、永遠の命を得る。また、常に主イエス・キリストの内になるようになる。そのようなことがありますから、いわば当然のこのように、それに伴う救いの諸々のことも、生じています。

後の手紙から、いくつか見ておきましょう。(聖書の個所をいろいろ読みますが、聞いていてください)。

罪の贖い、罪の赦しについて。エフェソ 1 章 7 節「私たちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。これは神の豊かな恵みによるものです」。

罪からの清めについて。第 1 ヨハネ 1 章 7 節「しかし神が光の中におられるように、私たちが光の中を歩むなら、互いに交わりをもち、御子イエスの血によってあらゆる罪から清められます」。

平和について。コロサイ 1 章 19、20 節「神は御心のままに、満ち溢れるものを余すところなく御子の内に宿らせ、その十字架の血によって平和を打ち立て、地にあるものであれ、天にあるものであれ、万物をただ御子によって御自分と和解させられました」。

次に水です。イエスさまはサマリアの女との遣り取りの中で、こう言われています。

4章10節「イエスは答えて言われた。もしあなたが神の賜物を知っており、また、水を飲ませてください、と言ったのが誰であるか知っていたならば、あなたのほうからその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう」。

では、生きた水とは何か？ 14節のイエスさまの言葉です。「私を与える水を飲む者は決して渴かない。私を与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水が湧き出る」。

永遠の命です。主イエス・キリストが私たちを永遠の命に生かしてください。

また、水はその性質から言っても、汚れを落とし、洗い清めるものです。そして主イエス・キリストにあっては、水は外的な汚れというより、何よりも魂の汚れ、これを清めるものです。

第1ペトロ3章21節「この水で、前もって表わされた洗礼は、今やイエス・キリストの復活によってあなたがたをも救うのです。洗礼は、肉の汚れを取り除くことではなくて、神に正しい良心を願い求めることです」。

洗礼のことが言われています。主イエス・キリストの脇腹から流れ出た水は、今の私たちに、洗礼を思い起こさせます。

それはちょうど、「血」が、今日もこの後行ないますが、聖餐式を思い起こさせるのと同じでしょう。

主から血と水が流れ出たという、このところに二つの礼典である洗礼と聖餐が、目に見える形で示されている、と言ってよいのではないのでしょうか。

主は既に最後の晩餐において聖餐を制定され、また今後復活され昇天されるに先んじて、洗礼を授けるようにと命じられました。言葉で告げられたことを、ここで、血と水そのもので、示しておられます。

洗礼は、主イエス・キリストに接ぎ木され、主と一つになること。主のものとなされることです。ガラテヤの言葉で言えば、キリストを着ることです(3章27節)。

聖餐は、キリストの体と血を受けることにより、あらゆる霊的な祝福を与えられ、恵みに養われ、成長することです。

——「血と水」について、少し長くなってしまったかもしれませんが、その恵みを振り返りました。

主の血と水に、私たちの信仰の喜び、霊的な祝福、確かな希望、といったことのすべてが凝縮されています。

主が十字架による贖いを成し遂げてくださり、そして今、この十字架の後、血と水を流されています。

私たちが主と共にあって、永遠の命に生きることができるのは、この血と水によることです。そしてこの血と水が、永遠に到る私たちの命と希望と喜びを、確かなこととして保証しています。

### 《3》

さらに、ここで起こっている二つのことが、旧約の御言葉の実現となっている。そのようにヨハネは告げています。それはどちらも、救いのご計画の実現ということ

す。

一つは、イエスさまの骨が一つも折られなかったことです。これは出エジプト記 12 章 46 節の実現です。「一匹の羊は一軒の家で食べ、肉の一部でも家から持ち出してはならない。また、その骨を折ってはならない」。

過越しという、エジプトでの奴隷状態から約束の地へと向かって解放されていく中で、過越しの小羊が屠られました。主イエス・キリストは、この救いと解放へと到る過越しの小羊になぞらえられています。

第二に、「彼らは、自分たちの突き刺した者を見る」という御言葉の実現である、とあります。

この御言葉は、ゼカリヤ書 12 章 10 節「彼らは彼らが刺し貫いた者である私を見つめ」という御言葉です。言葉遣いは少し違っていますが、ヨハネが文脈に合うよう少し直しているということでしょう。

このゼカリヤ書は、この 12 章の辺から、救いが告げられています。例えば 13 章 1 節に「その日、ダビデの家とエルサレムの住民のために、罪と汚れを洗い清める一つの泉が開かれる」とあります。

また、14 章 9 節には、「主は地上をすべて治める王となられる。その日には、主は唯一の主となられ、その御名は唯一の御名となる」とあります。

このように、救いのこと、また唯一の主である御方のことが預言されているゼカリヤ書。ここにおいて、主を「刺し貫く」ということも預言されている。そして、これが主イエス・キリストの十字架において実現されていますから、主こそ、まことの救いをもたらされた御方であり、すべての民が従い、仕えるべき唯一、まことの主である、ということになります。

——こうして、旧約からの約束・預言は、主にあって、それも特にその十字架において、実現されています。神さまが私たちが愛してくださっているその御旨は、主の十字架にあって、すべて実現されました。

神さまによって遣わされた唯一まことの救い主に、私たちは拠り頼みます。

また、この御方を遣わされた父なる神さまを心から誉め称えます。

そして、今、私たちの内で生き生きと働き、私たちに励まし、強めてくださる聖霊の導きを、さらに祈り求めていきます。

これが私たちの信仰であり、このようにして私たちは、喜んで生きるのです。

\*

今朝の個所は、その事実を頭で思い巡らしたり、絵に描いたりしようとする、とても暗く、陰惨な場面にもなってしまうことでしょう。勿論、私たちはそれから目を逸らすことはできません。

しかし、ただそれに留まるのでもない。目に見えるものを越えて、いわば心の目、魂のファインダーを通してみるならば、そこに確かに光が見えるでしょう。

ここで起こっていることはすべて、神さまの御旨どおりのことです。私たちが愛されて、私たちが滅びから救いへと招き入れてくださる神さまのご計画のうちに、すべてのことが起こっています。

ですから、光がある。光が見える。信仰に生きるとは、そのようなことではないでしょうか。どのような状況にあっても、そこに、またそこを越えた先にある、確かな光を、私たちは見るのです。

その光は神さまの愛であり、命です。真実であり、希望です。

この光に向かって、私たちは生きるのです。

2021年6月6日 朝拝

愛と恵みに富みたもう、天の父なる神さま、尊い御名を崇めます。

主は十字架において私たちの罪の贖いを成し遂げてくださり、私たちに赦しと命を確かなものとしてくださいました。

そのすべては、遥か昔からの神さまのご計画によるものでした。恵みを感謝いたします。

どうか、心から主に立ち帰り、絶えず堅く主と結ばれて、主にある確かな命と希望と喜びのうちに、これからも歩み続けていく者とさせてください。

十字架に現れている光。そして十字架の先にある光を絶えず仰ぎ見ながら、歩みゆく者とさせてください。

どうか、その歩みをあなたが絶えず、祝福をもって支えてください。

御手に委ねて、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

大場康司